議委員斎藤優「糞置庄と越前の条里」、同会事務局長平井健一「糞置庄遺跡の意義とその破壊」の三論文及び平井健一「福井県における文化財保存運動の現状と課題」と同会長白崎昭一郎氏の「あとがき」が収録されている。

本書を刊行した第一の企図は、近年県下の古代荘園が地域開発により破壊され、消滅するのは、学術的、文化財保存の観点から、はなはだ遺憾だとし、このさい特に危機にさらされた糞置庄（福井市二上町）――単に古代荘園の一遺跡というだけでなく、当時の荘園景観が復元でき、条里制施行等の諸問題を究明し得る荘園とみるが――にかかわる今日的重要課題を、歴史的に追究し、関係当局はじめ広く県民に訴えようとするものである。

まず岸教授は、越前東大寺領荘園の歴史的背景に照明を当て、坂井・足羽両郡下の鯖田国富庄・道守庄はじめ諸荘園が、越前古代史において果たした歴史的機能をつぶさに分析している。そこで問題の糞置庄については、正倉院開田図に宝字三年

書評

岸　俊男
斎藤　優
平井健一

越前の古代荘園
―糞置庄遺跡の危機―

〔福井の文化財を考える会刊〕

三　上　一　夫

京大教授岸俊男「越前の古代荘園――糞置庄と正倉院開田図――」、県文化財審

と天平神護二年の年代の違う二枚の絵図が残存するため、容易に比較検討でき、しかも後者の分が荘園の周辺の景観を大和絵風に巧みに描いており、その現在地もはっきり比定できるという。つまり現存する景観と絵図との関連が極めて的確に把提できるわけで、こうした現地の「歴史的景観」の保存は、学問的にもぜひ必要だと強調する。

斎藤氏は、越前の条里制についての具体的動向を、現地での調査結果と対比しながら論述する。そして近年の耕地の構造改善事業の急速な進展が、条里制の遺構を徹底的に消滅させる結果となり、せめて明治初年の地籍図――条里の遺構が正確に実測され遺存されているが――だけは、ぜひ国家の事業として永久保存の方途が講ぜらるべきだと真剣に訴えている。

平井氏も、糞置庄遺跡の重要な歴史的意義を論じ、地域開発による破壊の経過と、その問題点を鋭く指摘している。さらに県下の文化財保存運動の現状につき、特に道守庄遺跡、原目山古墳群、安保山古墳群、糞置庄遺跡の破壊の経過を述べ、強力な保存運動の必要性を主張する。

最後に白崎氏は、「あとがき」で、以上の諸論文の趣旨を総括し、越前の東大寺領荘園の全国に占める比重の高さから、特に糞置庄遺跡の国家的保存を強く要望している。

たしかに「保存と開発」は、極めて重要な今日的課題であるが、本書は糞置庄を中心に文化財〈古代遺跡〉保護の観点から、それぞれ専門の歴史家により学問的に論述し、しかも一般読者にも容易に理解し得るよう配慮されている点で、ぜひ一読に値するものと思考される

（斎藤印刷刊　八一ページ　定価五〇〇円）